

一 希くは此の謎を解け

堀れよ穿てよ、そこに水湧かん。打てよ叩けよ、そこに響あらん。鐘が鳴るかや、撞木が鳴るか、鐘と撞木と合へば鳴る。鐘は鳴るが性、撞木は鳴らすが質。鳴る鐘と鳴らす撞木と、出合つた所に、初めて殷々たる音響を傳へて、鐘も鐘の性を發揮し、撞木も撞木の能を顯現する譯。求めよ、さらば與へられん。聞けよ、さらば信ぜられん。求めずされど與へられたりと云ふ者あらば、聞かずされど信ぜられたりと云ふ者あらば、そはその奥底に、既に業に求めしめられ、聞かしめられし所以あるを知らねばならぬ。撞木の動くや、鐘に鳴る性あればなり。鳴ればこそ打て、響けばこそ叩け。鳴らざるもの響かざるもの、焉ぞ之を打ち之を叩かん。聞けよ求めよ、信仰は獲られ安慰は與へられんのみ。

釋尊すゝめたまはく「設ひ世界に滿てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞かば、會ず當に佛道を成じ、廣く生死の流を濟はん」。親鸞聖人たゝへたまはく「子の母をおもふが如くにて、衆生佛を憶すれば、現前當來とほからず、如來を拜見うたがはず」。蓮如上人さとしたまはく「いたりて堅きは石なり。いたりてやはらかきは水なり。水よく石を穿つ、心源もし徹しなば、菩提の覺道何事か成ぜざらんと云へる古き詞あり。如何に不信なりとも、聽聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候 間信を得べきなり」。

朱利槃特と云ふ人は釋尊の御弟子であつたが、至つて愚な性質で、何を聞いても覺えて居らぬ。至つて忘れることが上手で、自分の名前までも忘れて了ふ。仕方がないから「朱利槃特」と肉太に書いた板を首から胸に下げて居たと云ふ位。智慧は働かず、戒行は守ることが出來ず、我身ながら我身の愚さを嘆き、兄の離波多に叱り飛ばされ、逐ひ出されては、泣く泣く祇園精舎の

前にはらくく涙を零して居られた。時恰も釋尊はこの様子を御覽になり、近づいて之を慰め、其の所以を御尋ねになると、事の次第を打開けて申上げる。釋尊は可愛想に思召し、「心配するには及ばぬ、怖るゝには及ばぬ」と、慈悲の手に引いて精舎に歸り、一本の箒を授け、「お前この箒の名前を忘れぬ様になさい」と仰せられた。他の弟子の方が教へられるけれども、根が愚な人ゆゑ、箒のホウを思へばキを忘れ、キを思へばホウを忘れて、如何しても覚えられない。朝から晩まで毎日々々、ホウくキキホウくウと云つた風に一本の箒を振り廻しては、一生懸命に覚えやうとしても、あとからく忘れて了ふ。

總じて物忘れにも色々ありますが。有名な天龍寺の峨山和尚が六歳で出家の時、「坊は何處から来たか」と師の仰せに「坊は来た處を忘れた」と答へて禪の妙味を示されたのや。親鸞聖人が「至心信樂己を忘れて、無行不成の願海に歸す」と、他力信仰の極致を顯はされたのやは、善き方の分です。『孟子』のやどがへに女房を置忘れた如きは、愛嬌でもあらう。同じ物忘でも斯様なのは、一寸考物。自分の女房の前に恭しく手をついて「さて貴女は何誰でございましたか、偉い親切にして下さる」と尋ねるので、女房は可笑しくて堪らざ「まあ戯談云つては不可ませんよ、妾は、貴郎の女房」と云へば「はてなそんなものがあつたか知らん」。女房は面を膨らし「あつたか知らんとは餘り情ない。子供が二人まであるのに」。男は小首傾けて「そんな子供があつたか知らん」。貴郎困るぢやありませんか、確りしてお呉れよ。「あゝさうであつたか。して男であつたか女であつたか、お前知つて居るかへ」。馬鹿らしい。自分の子を男であつたか女であつたか解らぬやうでは」と、女房涙を流して「貴郎よく覺えて居なさいよ。二人で兄と妹」。「あゝ、解つたく、年齢は

幾歳であつたかな。「アレ又歳を忘れて居る、兄が九歳で、妹が七歳。して貴郎二人の名を知つて居りますか」。「サア……」。「又忘れたのかい」。

「はい女房が歸つて來たら尋ねて置ませう」。是は横着に違ひない。

朱利槃特はこんなのではなく全く眞劍であつたが、覺えやうと思ふ一心で十日も二十日も經つ内、漸く箒の名を覺えた。斯くて箒の事ばかり考へて居ますと、後には箒は何をするものであらうかと思出した。箒は此で塵を掃除するものである。釋尊は此箒を以て何を教へて下さるのだらうかと考へた。箒は塵芥を除くものである。我身の煩惱は塵埃である。智慧は箒である。智慧の箒を以て煩惱の塵埃を除くのであると思付いた。斯様に漸々と箒のことを考へ來つて、遂に愚な朱利槃特も阿羅漢の悟を開き、釋尊の御前に出て御領解を述べ、「善哉々々お前の云ふ通りである」と、釋尊のお許を得たと云ふことであります。

是に由りて之を觀れば、道は邇にあり之を遠きに求むべからずとの教が、明に此事實の裡にこもつてあるやうに思はれる。悟といふものは、何か高遠い理屈を考へ奥深い理由でも究めねば、得られぬやうに思へども、釋尊の御教はさうでない。釋尊は至極つまらなさうな、何にもなりさうもない、箒を一本あてがはれた計りである。而して朱利槃特も亦此箒一本を大切にしていり、遠い所に開かれたのである。我等も亦、彼の如來の御慈悲を高い所に眺めたりと申さねばならぬ。近くく我等の周圍に漲つてある如來の大悲を、一切の物の上に味はゝねばならぬのであります。